『正信偈』に親しむ ⑧

【本文・読み方】

獲信見敬大敬喜
信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん

即横超截五悪趣
すなわち横に五悪趣を超截す。

一切善悪凡夫人
一切善悪の凡夫人、

聞信如来弘誓願
如来の弘誓願を聞信すれば、

仏言広大勝解者
仏、広大勝解の者と言えり。

是人名分陀利華
この人を分陀利華と名づく。

【現代語訳】

その下が明るくて闇にならないように仏の真実のこころはいつも澄みきっているのです。

その時迷いの悪道を願いの力で横にすみやかにとび超えてたちきるのです。

すべての善や悪にしばられているひとびとが

仏の願いを聞き信じるならば

仏はほんとうによくわかった者と言われます。

この人を分陀利華と名づけるのです。それは泥に咲いて濁りにそまらない白蓮華です。

【解説】

迷いの生が終わり あたらしい生が始まる

仏教では、私たちの生きている世界は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という迷いの世界と言われます。私たちが身を置いている家庭、地域社会、職場などどれもが生きづらい世界になっていると示されます。

日頃、自分は居心地のよいところにいると思っていても、突然一緒にいる人たちから、ここから出て行けと追い出されそうになるとすれば、その人にとって地獄といえるでしょう。一方、ひとりの人がその場で他の全員に命令し、皆が従っていくとすれば、その人は自分以外のだれをも信じず、仲間も無視し孤独な世界に閉じこもっていきます。この人は天（天人）という迷いの世界にいるのです。

結局、私たちの生きる世界には、安心できる居場所はないのです。それがために、私たちはたえず安住の地を求めつづけ迷いつづけることになります。

それは、自分はどこから生まれてきたのか、その根拠を忘れてしまっていたのです。その私たちに、生まれ出てきた根源を示して、すくい遂げようとされるのが如来の本願なのです。私たちが南無阿弥陀仏とお念仏を称えるとき、自分たちが生まれた故郷は、阿弥陀如来の世界だったと気づくのです。

共に生きる人々と、自分たちの本当の故郷は阿弥陀如来の世界だったと信じて歩みはじめるとき、その出会いを喜びあい、真に心の安らぎを得ることができるのであります。

（次号に続く）

おいしい記憶

平成最後のお正月、いかがお過ごしでしょうか。年末に、一年・平成を振り返るテレビ番組がありました。たくさんの災害や事件が起こったことは事実ですが、私の記憶では辛かったり、苦しかったことばかりが刻み込まれているような気がします。心地よいこと、幸せなことはすぐに忘れてしまうか、慣れてしまうのかもしれません。

去年一番おいしかった食事（食べ物）は何？と言われても、すぐに思い出せません。年末、初対面の方と食事をする機会がありました。確かにごちそうだったのですが、おいしかったという記憶がありません。緊張していたのか、会話に一生懸命だったためと思うのですが、もったいないなと思います。

楽しさやうれしさといった、食卓での時間や雰囲気がおいしい記憶になっていくようです。生きていくためにいのちをいただいている食事、幸せをかみしめるための食事でもありたいものです。

（y）

編集後記 昨年七月、父との死別は重いできごとでした。六十九年間の父とのであいは、語りきれません。ただ、私が四十歳の頃、「いい坊さんになってくれよ」と語ったひと言は今もはっきり覚えています。父の願っていたことと私の気持ちとが繋がった時かもしれません。生涯、お念仏の教えをともに聞いてまいりたいと思います。よろしくお願いします。（k）